

「この国に生まれてよかった。」

大阪市立天王寺中学校 3年 請田 絢子

朝もやの中、背中に円盤を載せた飛行機が離陸していきます。早期警戒管制機、一千キロ以上も飛びながら監視を続け「何も起こらないのが最高のご褒美」という地味な仕事だとフロントのお姉さんが教えてくれました。浜松市のホテルでのことです。お姉さんの笑顔から地元の誇りなのだと思います。

テレビでウクライナ情勢の報道が続きます。その中でジャベリンという対戦車ミサイルを知りました。日本にもあればいいのにと思っていたら、国内メーカーが開発を済ませ、一千セット以上が既に配備され、操作要員の訓練も終わっているとのこと。一体だれが用意したのだろうと驚きました。

新型コロナの治療薬の候補を即座に見つけ出したのはコンピューター富岳でした。世界最高峰のコンピューターが作られていたことも大きな驚きでした。

これらのおかげで私たちの日々の生活は守られ安心と安全を与えてくれます。早期警戒管制の日々の運用も、対戦車ミサイルやコンピューター富岳の開発も、声高に叫ぶことなく、自らの務めを果たす人々の地道な努力が集まり積み重なってきた結果です。一人の天才の力でもなく、一人の英雄によるものでもありません。その人達の努力を支え続けて実現させてきたのは、多くの人々によって納められた税の力です。納められた税を基礎として、その基礎の上に安心・安全な社会が築かれているのだと知りました。

「納める」という語は、『古くはヲサメルであり、物事をきちんと整理して、筋道にかなったようにするのが本来の意味であり、心の乱れをヲサメル、身をヲサメル、家をヲサメル、家をヲサメル、「用意ヲサヲサ怠りなし」などと使われる。物事の筋道を整える力がない、つまりヲサがない年端のいかない者をヲサナイという。そして、人の上に立つ者についていえば統治・行政を行うことであり、下の者の立場でいえば、定められた税を出すことで筋をきちんと通して安心させることを意味していた。』と国語学者の大野晋氏は述べています。国を治めるのも、身を修めるのも、争いを収めるのも、税を納めるのも同じ意味だったのは新しい発見でした。ヲサメルとは、あるべき姿を実現することなのです。

私の子とその子達が、他国の侵略に脅えることもなく、砲弾の音に身をすくめることもなく、未知のウィルスにも果敢に立ち向かえる国に暮らして欲しいと願います。

私は心に決めました。しっかり勉強して、ちゃんとした資格をとり、可能な限りの技術を身につけ、職業人として働くことで社会に貢献します。それは同時に税を納めることでこの社会を支える一員になることです。

「この国に生まれて良かった」と心の底から思います。